

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾くかかりでした。けれどもあまりじょうずでないという評判でした。じょうずでないどころではなくじつはなかまの楽手の中ではいちばんへたでしたから、いつでも楽長にいじめられるのでした。

ひるすぎみんなは楽屋にまるくならんでこんどの町の音楽会へ出す第六交響曲の練習をしていました。

トランペットはいっしょうけんめい歌っています。

クラリネットもボーボーとそれにてつだっています。

バイオリンも二いろ風のように鳴っています。
ゴーシュも口をりんとむすんで、目をさらのようにして楽譜を見つめながら、もう一心に弾いています。

にわかに、ぱたっと楽長が両手を鳴らしました。

にわかに、ぱたっと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

みんなぴたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

「セロがおくれた。トオテテ テテティ、ここからやり直し。はいっ。」

みんなは今のところの少し前のところからやりなおしました。ゴーシュは顔をまっ赤にして、ひ

たいにあせを出しながら、やっと今言われたところをとおりました。ほっと安心しながら、つづけ

てひいていますと、楽長がまた手をぱっとうちました。

「セロつ。糸が合わない。こまるなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」

みんなはきのどくそうにして、わざとじぶんの譜をのぞきこんだり、じぶんの楽器をはじいてみ

たりしています。ゴーシュはあわてて糸を直しました。これはじつはゴーシュもわるいのですが、

セロもずいぶんわるいのでした。

「今の前の小節から。はいっ。」

みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげていっしょうけんめいです。そしてこんどはか

なりすすみました。いいあんぱいだと思っていると、楽長がおどすような形をして、またぱたと

手をうちました。またかとゴーシュはどきっとしました。が、ありがたいことにはこんどはべつの

人でした。ゴーシュはそこで、さっき自分の時みんながしたように、わざとじぶんの譜へ目を近づ

けて何か考えるふりをしていました。

「ではすぐ今のつぎ。はいっ。」

そらと思ってひきだしたかと思うと、いきなり楽長があしをどんとふんで、どなりだしました。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことだ。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことだ。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことだ。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことだ。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことだ。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことだ。